



# Oracle Java SE Universal Subscription: Java SEへの投資を確かなものにするために

ソフトウェア・プラットフォームのメンテナンスとパッチ適用は、基幹業務アプリケーションの管理において最も重要な課題の1つです。Oracle Java SE Universal Subscriptionにより、ライセンスとサポートをシンプルなサブスクリプションに統合し、企業全体でJava SEのインストール、アップデート、アップグレードをコスト効率よく管理できます。

Java SEの主要コントリビュータ兼スチュワードを務めるオラクルは、長期間のサポートと、適時かつ予測可能なスケジュールのアップデートを保証できる唯一の企業です。オラクルのJava SE Universal Subscriptionでは、アップデートを管理するための一貫したツールを提供しているため、企業は自社のJavaプラットフォームを監視し、Java 8のパフォーマンスを向上させ、専門のJava SEサポート・チームに直接問い合わせることができます。

## Java SEへの投資を確かなものにするために

Javaは最も幅広く使用されているプロフェッショナルな開発言語であり、クラウド開発で最も選択される言語のひとつです。急速に変化していく開発者のニーズに応えるため、オラクルとJavaコミュニティは、Java SEの機能リリース・サイクルを6か月に短縮し、開発者にイノベーションを速やかに提供しています。以前のメジャーリリースは、2-3年ごとに多くの機能が提供されてきましたが、現在は6か月ごとに機能リリースを行っています。6か月ごとの機能リリースでは更新内容が少ないため、Javaのイノベーションに対応しやすく、新しいリリースに移行しやすくなっています。企業にとっては、予測可能性と一貫性が向上し、簡単な更新とアップグレードのスケジュールリングが可能になります。

Java 開発者は待望の機能を何年も待つ必要がなくなりました。また、6か月ごとにJDKの最新版にアップグレードすることで、新機能を利用することができます。ライセンスを簡素化するため、オラクルは、Oracle JDKの最新版および最新の長期サポート版のアップデートをOracle No-Fee Terms and Conditions (NFTC) ライセンスの下で提供しています。また、多くのLinux



企業はJavaのバージョン選択において、できるだけ柔軟でありたいと考えています。最近の調査では、回答者の56%がアプリケーションの実稼働を開始した時点のバージョンを使い続けることを希望し、Javaの新機能バージョンにアップグレードするのは、開発スケジュールではなく、ビジネス・スケジュールに基づいて実施されることが判明しました。Java SE Universal Subscriptionは、これを可能にするために、固定アップデート・スケジュールを上回る柔軟性を提供します。<sup>1</sup>

**企業はますます総合的なソフトウェア・サポートとミッション・クリティカルなソフトウェア・パッチ適用に着目するようになっています。**

**ほとんどの大規模な組織では何十もの異なるJavaバージョンがインストールされています。**

<sup>1</sup> Oracle Java SE Universal Subscription: Java SE への投資を確かなものにするために  
Copyright © 2024, Oracle and/or its affiliates

ディストリビューションで使用されているのと同じGNU General Public License (GPL)の下で、最新のJDKバージョンのOpenJDKビルドも提供しています。これにより、オラクルのJDKビルドは、企業、開発者、ライブラリ管理者にとって強力な選択肢となっています。組織がより簡単にJava SEのライセンスを取得し、長期サポートを受け、古いJDKバージョンのアップデートにセキュアにアクセスできるようにするために、オラクルはJava SE Universal Subscriptionを提供しています。

JDK 11および8のアップデートは、個人的な使用、開発用途、およびオラクル製品との使用において無償使用が許可されるOracle Technology Network License Agreement for Java SE (Java SE OTN License)に基づいて提供されます。その他の用途には、Java SE Universal Subscriptionが必要です。Oracle No-Fee-Terms and Conditions Licenseに基づくJDK 17のアップデートは2024年9月まで、JDK 21のアップデートはJDK 25 LTSリリース（2025年9月予定）の1年後までご利用いただけます。Java SE Universal Subscriptionを利用することで、クラウド、サーバー、デスクトップのデプロイメント管理に役立つツール、機能、アップデートを利用することができます。このようなエンタープライズ管理機能は、投資したJava SEのパフォーマンス、安定性、セキュリティを最適化するうえで役立ちます。Java SE Universal Subscriptionでは、お客様のスケジュールに合わせてアプリケーションをアップグレード、更新することができます。

## 企業全体でのJavaの管理を強化

企業全体のシステムを見直してみると、ビジネスにとって重要なアプリケーションがJava SEで動作していることが分かることがあります。通常、多数の異なるバージョンのJavaプラットフォームがデスクトップ、サーバー、クラウドにインストールされています。環境に旧バージョンのJavaを残すことが、セキュリティ・リスクになることがあります。最新のパフォーマンスとセキュリティ向上のため、すべてのアップデートをインストールする必要があります。

- Oracle Cloud Infrastructure (OCI)のサービスであるJava Management Service (JMS)は、クラウド上やお客様の拠点で実行されているJavaデプロイメントを監視することができます。これにより、企業におけるJavaの使用状況を観察し、管理することができます。これには、サードパーティのライブラリに関連するCVEの報告も含まれます。JMSは、サードパーティのクラウドを含むJavaポートフォリオ全体に対して正確かつ詳細な理解とアプリケーション・ライフサイクル管理機能により、お客様を支援します。詳しくは、「Java Management Serviceのスタート・ガイド」をご覧ください。
- Java SE Subscription Enterprise Performance Pack (EPP)は、JDK 17 Java Virtual Machine (JVM)のパフォーマンスをJava SE 8サーバーのワークロードに提供します。
- Java Flight RecorderおよびJava Mission Controlは、最小限のパフォーマンス・オーバーヘッドで稼働中の診断を実現し、システム稼働率を向上させます。

重要なアプリケーションにおいて障害が発生した場合、時間あたりの平均コストは数十万ドルにもなります。さらに、システム障害がブランド、評判、顧客満足度に悪影響を与えることも多々あります。最悪の場合、サイバー攻撃によってビジネスのイメージが低下します。<sup>2</sup>

## サポート

430,000社を超えるお客様がオラクルを選択し、Oracle Supportを利用することで、テクノロジー投資を強固なものにしています。クラウドにおけるワークロード、サーバー、デスクトップのサポートは、Java SE Universal Subscriptionにおいて肝となる部分です。Java SE Universal Subscriptionを購入するとOracle Premier Supportが付帯されます。これには、経験豊富な多言語対応のオラクルのJavaサポート・チームへの24時間365日の問い合わせサービスが含まれています。Oracle Java SE製品のオラクル[Premier Support](#)の詳細については、[Oracle Lifetime Support Policy](#)をご覧ください。これらのページでは、[サポート・ロードマップ情報](#)とともに、オラクルの比類のないJava SE Universal Subscriptionサポート範囲を包括的に紹介しています。

Java SE Universalのお客様は、Oracle Java SEバイナリに対するOracle Premierサポートに加え、サードパーティのライブラリやランタイムを含むJavaポートフォリオ全体に対するトリアージ・サポートを受けることができます。業界をリードするJava SEのサポート・リソースに直接アクセスできることで、以下が可能になります。

- Javaの問題を迅速かつ効率的に記録して解決。
- 問題解決までの時間を短縮し、Javaのサポート費用を最小限に抑える。
- Javaアプリケーションの稼働時間を最大化。

## Javaのパッチとセキュリティ・アップデート

Java 8のアップデートは、2019年4月からオラクルによってリリースされています。これらのリリースを本番環境で使用する場合は、オラクル製品で使用する場合を除き、サブスクリプションが必要です（個人および開発用途ではサブスクリプションは必要ありません）JDK 11のアップデートは2019年9月から同じ条件で入手可能です。JDK 17のアップデートは、2024年9月以降も同様にリリースされます。公開されるJava Life Time Supportのリリース情報に、ライセンス期間が終了したバージョンのJavaも含まれることは、組織にとって重要な意味があります。オラクルでは、Javaパートナーとの連携による幅広い経験から、ほとんどの大企業がさまざまな理由で複数のバージョンのJavaを実行していることを認識しています。自社のアプリケーションが特定のバージョンのJavaにしか対応していない組織もあります。Java SE Universal Subscriptionは、運用中のJavaのバージョンの柔軟性を向上させることで、このようなビジネス・ニーズに対応できるように設計されています。

Java SE Universal Subscriptionの期間に基づくライセンスとサポートを利用することで、バージョン間の移行時期を柔軟に選択できるようにし、同時にJavaプラットフォームを安定かつ最新の状態に保つことができます。システムに旧バージョンのJavaを残しておく、セキュリティ・リスクになることがあります。最新のパフォーマンス、安定性、セキュリティの向上を得るためには、必ずアップデートをインストールする必要があります。

## Java SE Universal Subscriptionの まとめ

- エンタープライズ・クラウド、サーバー、デスクトップ・デプロイメントに必要なすべてのJava SEライセンスに対応
- さまざまなバージョンに対するパフォーマンス、安定性、セキュリティ・アップデートを利用することで、Java SEへの投資を保護
- 最大限の柔軟性を持った形でJavaアプリケーション・ポートフォリオを管理し、現在使用しているJavaバージョンを自社のスケジュールでアップデートが可能
- 最新のJavaアップデートおよびセキュリティ修正を適用した最新の状態を維持
- 企業全体のJava SE 8デスクトップの使用の一元的な制御と管理を実現
- Javaのデプロイメント、監視、運用コストを最小化

## 企業パフォーマンス

- Java SE Subscription Enterprise Performance Packは、JDK 8のサーバー・ワークロードにJDK 17のパフォーマンスを提供します。JDK8の単純な置き換え。サーバー側Linux（Intel ARM）、64ビット、ヘッドレス
- Oracle GraalVMは、最新のマイクロサービス向けのハイパフォーマンスなランタイムを提供します
- Enterprise Performance PackとOracle GraalVMはそれぞれ、Java SE Universal Subscriptionのお客様とOracle Cloud Infrastructure (OCI) ユーザーには追加費用なしで提供されます

組織は、企業または業界全体が要求する義務に対して従わなければならないことがあります。具体的にはサポートされたソフトウェア・プラットフォーム上で、すべてのセキュリティ・パッチがインストールされた最新の状態を保つことです。Java SE Universal Subscriptionを使用すれば、これらの義務を簡単に果たすことができます。

- ライセンス期間が終了したバージョンのJavaでも、全面的にアップデートされる Java LTSのリリースを継続して入手できるので、アップグレード・パスをコントロールできます。
- 異なるバージョンのJavaを並行して効率的に実行できるため、さまざまなアプリケーションの互換性を管理できます。

## Java向けエンタープライズ・クラスのパフォーマンス

- JDK 8サーバー・ワークロードを実行しているサブスクリイバーおよびOCIユーザーは、Java SE Subscription Enterprise Performance Pack (Enterprise Performance Pack) を利用することができます。パフォーマンス・パックは、JDK9からJDK17で開発された大幅な改善点を、JDK8のワークロードに提供します。これには、JDK15の超低レイテンシ・ガベージ・コレクタZGCや、JDK9のコンパクトな文字列によるメモリ節約など、メモリ管理とパフォーマンスの大幅な向上が含まれます。使用しているJDK8を単純にこれに置き換えるだけで、メモリやCPUの容量に近くまで負荷のかかるアプリケーションを実行しているお客様は、すぐにその効果を実感することができます。社内およびパートナーによるテストでは、負荷の高いアプリケーションのメモリ使用量とパフォーマンスの両方が最大40%改善されたことが確認されています。
- また、サブスクリプションには、最新のマイクロサービス向けのポリグロット機能を備えた高パフォーマンスのランタイムであるOracle GraalVMが含まれています。GraalVM Native Imageを使用することで、起動時の大幅な改善と、事前コンパイルによるさらなるメモリ節約が実現します。GraalVMの詳細については、[データシート](#)をご覧ください。

## Java SE Universal Subscription

企業全体の期間に基づくJava SE Universal Subscriptionモデルには、クラウド・デプロイメント、サーバー、デスクトップのライセンスとサポートが含まれます。

- 従業員1人当たり月額15ドルからと、ボリュームに応じたシンプルな価格設定です。
- ベアメタルサーバー、仮想サーバー、コンテナ化されたサーバーなど、オンプレミスやクラウドにおけるJDKインスタンス数を正確にカウントする手間を省くことが可能となります。
- サードパーティのライブラリやランタイムを含む、お客様のJavaポートフォリオ全体に対し、トリアージ・サポートを提供。
- デスクトップ、クラウドワークロード、オンプレミスを含む幅広い社内利用ライセンス権。
- Java SE Subscription Enterprise Performance Packを含む コマーシャル機能セキュリティリスク検出機能を備えた高度な管理および導入ツール。

- Oracle Java SE の最新および旧リリースにおけるパフォーマンス、安定性、およびセキュリティのアップデート。
- Oracle GraalVMのご利用が可能となります。(詳細については、[GraalVMのデータシート](#)をご覧ください)。
- MOS(My Oracle Support)経由でのOracle Support。

## リソース

- [Java SE Universal Subscriptionソリューションに関する詳細情報](#)
- [Java SE Subscription Enterprise Performance Packのブログ](#)
- [GraalVM製品シート](#)

Javaへの投資を最大限に活用するために役立つ多くのツール、機能、資産を活用しているかどうかを確認するために、Java環境を簡単にチェックしてみましょう。[オラクルとつながる](#)ことにより、Javaジャーニーの成功を確実にするエキスパート・サポートをさらにご利用いただけます。

## 組織全体におけるJava SEの管理についてよくある質問

ご質問内容	ビジネス・シナリオと影響	ソリューション
<p>組織内のJavaのバージョンはいくつありますか？</p> <p>最新のパフォーマンスおよびセキュリティ修正を利用できないものはいくつありますか？</p>	<p>多くの場合、企業内のさまざまなアプリケーション領域がそれぞれ別のチームで管理されており、Javaのデプロイメントを管理するための一元的なポリシーがないことがよくあります。オラクルは、Javaの最新リリースに対するパフォーマンス、セキュリティ、および安定性を向上させるパブリック・アップデートを提供していますが、それ以前のバージョンのアップデートを本番環境で使用するには、Java SE Universal Subscriptionが必要です。</p>	<p>Java SE Universal Subscriptionの機能である企業全体のJavaの使用状況を把握するための優れたモニタリング・ツールを使用すると、社内でのバージョン、アップデート、セキュリティ・パッチが使用されているかを監査および管理できます。さらに、Java SEプラットフォームのすべてのメジャー・リリースのすべてのパッチを利用できるようになります。</p>
<p>すべてのJavaアプリケーションを最新のリリースにアップデートしていますか？</p> <p>最新のアーリー・アクセスのリリースを利用していますか？</p> <p>次回の長期サポート・リリースへの移行についてどのような計画を立てていますか？</p>	<p>Javaバージョン間の移行に際し、時間とコストのかかるQAのやりとりが必要になることがあります。すべてのアプリケーションをすばやく最新のバージョンにアップグレードするには、社内のJavaに関する専門知識やリソースが足りないことがあります。アプリケーションが基幹業務用でない場合や、何年も安定して稼働してきた場合もあります。ただし、このような旧バージョンは、パッチやサポートがないため、企業をリスクにさらしている可能性があります。</p>	<p>Java SE Universal Subscriptionには、Java SEプラットフォームのすべてのメジャー・リリースのすべてのパッチとグローバルのサポートが含まれます。Java SE Universal Subscriptionは、旧バージョンのJavaパッチを提供します。これにより、Javaプラットフォームの最新のパフォーマンス、安定性、およびセキュリティが改善されることから、これらの旧バージョンをより長く利用することが出来ます。</p> <p>Java SE Universal Subscriptionではサポートをご利用いただけるため、サードパーティへの依存の問題をより簡単に解決することができます。</p>
<p>組織のデスクトップにはJavaのどのバージョンがインストールされていますか？ Javaのアップデートはどのように管理されていますか？</p>	<p>組織全体のJavaの使用状況について把握できる範囲に限界を感じているかもしれません。多くの組織では、アップデートの実施は不定期で、個々のチームまたは個人がその場限りの管理をしています。これは特にデスクトップ環境に当てはまります。これにより、エンタープライズ・プラットフォームのコア・コンポーネントが適切に管理されていないという状況が浮き彫りになります。</p> <p>仮想化やコンテナ化されたサーバー環境の利用により、この問題はさらに複雑化します。仮想デスクトップが普及するにつれ、クライアントサイドはますます難しくなっています。</p>	<p>Java SE Universal Subscriptionでは、組織のデスクトップの管理に役立つツールやアップデート方法を提供します。「デプロイメント・ルールセット」の管理を支援するツールを使うことで、難しい要件や、ときには矛盾するような要件のサポートを可能にします。</p>

<p>業界のコンプライアンス・レビュー（HIPAAなど）が必要なときに、Java インストール・ベースを報告できますか？</p>	<p>機密情報を保存している場合、定期的なPCIまたはHIPAA監査の対象になり、環境のサポートが切れていないこと、最新のセキュリティ・パッチおよびアップデートで最新の状態が保たれていることを示す必要があります。</p>	<p>Java SE Universal Subscriptionに付随する管理機能により、さまざまなJava SE環境の管理を維持し、組織全体のさまざまなバージョンについて報告できるようにします。</p>
<p>Log4JShellなどのセキュリティ問題に対して脆弱である可能性があるかどうかは、どのようにしてわかりますか？</p>	<p>JDKの最新バージョンにパッチを当て、保守することだけが、Javaに関連するセキュリティ対応ではありません。アプリケーションのサードパーティへの依存も問題となっています。ソフトウェア部品表（SBOM）による業界の回答はまだ固まっていますが、追加チェックを行うことで、このような問題を回避することができます。</p>	<p>Oracle JDKとJava Management Serviceを併用することで、アプリケーションの依存関係や使用するライブラリに関するインサイトが得られ、CVE（一般的な脆弱性とエクスポージャ）の可能性も報告されるため、緩和策や解決策を講じることができます。これにより、組織はリスクを知らない状態から、リスクを管理できる状態へと変わることができます。</p>
<p>Javaプラットフォームにおける潜在的な課題に対してどのように対応していますか？</p>	<p>Javaプラットフォームに関連する問題が発生したときにサポートに問い合わせができないと、インターネット上で解決策を探す以外に方法がありません。オンラインで見つかる解決策は、正確でなかったり、最新でなかったり、効率的でなかったりします。解決策の調査とテストには時間とコストがかかり、場合によっては高額なコストとアプリケーションのダウンタイムが発生する可能性もあります。</p>	<p>Java SE Universal Subscriptionでは、オラクルのJavaのグローバル・サポートの専門家チームを活用できます。Javaの問題を直ちに解決できる道筋を手にすることで、リスクが低減し、ダウンタイムのリスクは軽減または除去されます。</p>

<sup>1</sup>WikibonによるJavaに関する2019年の調査データ（対象: 従業員30,000人以上で、50を超えるJavaアプリケーションを利用している大企業59社）

<sup>2</sup>IDCの「Protect Applications by Integrating Security into DevOps(セキュリティのDevOpsへの統合によるアプリケーション保護)」#US43015217

## お問い合わせ

050-3615-0035 にお電話いただくか、[oracle.com/jp/](https://oracle.com/jp/)にアクセスしてください。

もしくは、[oracle.com/jp/corporate/contact/](https://oracle.com/jp/corporate/contact/)で最寄りのオフィスをお探してください。

 [blogs.oracle.com](https://blogs.oracle.com)

 [facebook.com/OracleJP](https://facebook.com/OracleJP)

 [twitter.com/Oracle\\_Japan](https://twitter.com/Oracle_Japan)

 [linkedin.com/company/oracle-japan](https://linkedin.com/company/oracle-japan)

Copyright © 2024, Oracle and/or its affiliates. 無断転載を禁じます。この文書は情報提供のみを目的とし、内容は予告なく変更される場合があります。この文書は、エラーがないことを保証するものではなく、口頭または法律で明示されているかどうかにかかわらず、商品性または特定の目的への適合性の黙示の保証および条件を含む、その他の保証または条件の対象ではありません。当社は、この文書に関してもいかなる責任も負わないものとし、この文書によって直接的または間接的にいかなる契約上の義務も発生しないものとします。この文書は、当社の事前の書面による承諾を得ることなく、目的の如何を問わず、電子的手段または印刷によるものも含めていかなる形式や手段によっても複製または送信することは禁じられています。

Oracle、JavaおよびMySQLはオラクルおよびその関連会社の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

IntelおよびIntel XeonはIntel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARC商標はライセンスに基づいて使用されるSPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD、

Opteron、AMDロゴおよびAMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devicesの商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。0120

免責事項: このドキュメントは情報提供を目的としています。何らかの資料、コード、または機能を提供することを約束するものではなく、購入を決定する際に根拠とされるべきものではありません。このドキュメントに記載されている特徴または機能の開発、リリース、時期および価格については、オラクルの裁量により決定されます。

